

<随想>悠々自滅

著者	槇 秀明
雑誌名	日本文学誌要
巻	56
ページ	98-99
発行年	1997-07-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019960

悠々自滅

槇 秀明

今、私の二階の部屋の窓から雪を被っている月山を見ている。森敦の描いたあの月山である。これから夏にかけてスキーが楽しめる霊峰だ。冬にスキーができずに春先からなんだよ、と異郷の友人に言う「フーン」とわかったようなわからないような顔をする。冬は雪が多すぎて無理なのである。過ぎたるは及ばざるが如しなのである。

大学を卒業して二十年以上が経った。卒業後東京・千葉で十年程高校の国語教師をやったが、今から十年位前に、この月山や朝日の峰々が眺望できる郷里山形に移り住んだ。実家からはわずかばかり離れた、イバラトミオの住む名水百選に数えられた清流の岸辺に居を構えた。組織や体制の枠から離れ、現在はそれなりに自立した生活を営んでいる。引越した当初は経済的に相当逼迫していたが自由と解放感に酔っていた。また反面では友人への手紙に、自由には不安がつきまとうなどと書いたり

もした。生きていく上での経済的不確実性からだ。個人レベルでもそれ以上でも自由には危険が伴うのと同じ理屈らしい。自分自身を律し、自らを自らで束縛しなければならぬのも自由の枠内ではあるけれども、一日の大半を占める組織の束縛といったものからは自由だし、人間関係においても煩しさは少ない。ただ地域社会のそれまで無視することはできないが。春風のように言い流せば、否、秋風でも木枯らしでもよいのだが、悠々自滅の生活をしている。実はこの言葉には先達がいる。

昨年の末頃、法政の先輩でもあり恩師といってもいい方より近況を書いた葉書を頂いた。その中にこの「悠々自滅」の生活ですが……という言葉があったのだ。最初は自滅という言葉の持つ負のイメージから、第一印象として自虐的な言い回しに感じられた。まさか深謀遠慮ではあるまいが、意味深長だと思った。その前年だったか確かに奥様を病気で亡くされている。その寂しさの表われなのかもしれない。そう考えたのもほんの一瞬间であつた。「悠々自滅」は素直にとればよい。はるかな時の流れの中でゆっくりと心静かに、自然のままに、滅びるままに、といった一種諦観に似た悟りの風情が漂っている。私は禅寺の次男坊だから「滅」』『「滅度」』ぐらいは知っている。生死の苦悩を超越することである。

その人は夏目漱石に格別の思い入れがあつたはずである。恐らく「則天去私」に通じる意味合いがあるはずだ。自分の行為で自らを滅ぼすようなことを「悠々」と言う言葉と結びつけてしまうことをその人は行なうはずもない。こじつけて居直るこ

ともないだろう。私なら有り得るかな、と思うのだが……。

まさか結婚式の色紙に書ける言葉ではないが、私のような人間には相応しい言葉の一つとして銘記したい。

その人に関連してもう一つ触れておきたい。

高校の時、私は村山槐多という一人の画家・詩人と邂逅した。以後しばらくその存在がわだかまった。当時は——今は不勉強で知らないが——彼を人道主義の枠の中で扱っていたが、私にはそれがどうしても理解できずに納得がいかなかった。私の大学時代槐多は決して無名ではなかったが、知る人はほとんどいなかった。当然友人達と議論する機会もなかった。資料も乏しく人間槐多を見つめていく不安と苛立ちを覚えはじめ、自分の中に単なる虚像を作ってしまったいかねない恐れで人間槐多から遠退いてしまった。

以来かなりの年月が経ち、私の結婚式の席上、あの「悠々自滅」の方が祝辞を述べて下さった。その最後で次のような村山槐多の詩を引用し、戒めというべきか、指針というべきか、一つの覚悟を与えて下さった。

苦しめよ

一切の苦しみを味はへよ

そは腐肉の塩を吸う業なり

苦痛こそ汝の

ただ一箇の蘇生の道なり

人は楽を求めたがる。当然私自身もそれを否定できない。楽

を求めようとすれば、行為も精神も逃げようとする態勢に入っている。その結果は決して最善には至らない。だから苦しみや困難の入口に立ったと自覚した時、そこから逃れようとせずに敢へて引き受けようとする勇氣と決断を持った時、初めの苦痛は薄らぎ新たな苦痛を覚悟できる。決断と覚悟が苦しみを超克できる。そして自由に至る。

村山槐多の詩は逃げようとする精神に百騎千騎の援軍を与えてくれる。彼の人もこの詩に共感したのか、それを地で生きてきたのか、或いは私のような人間に最も相応だと考えたのか、仏前の結婚式披露宴において淡々と力強くこれを読んで下さった。禅寺本堂でのその時の緊張感を今も忘れてはいない。

今、山形はようやく桜の花も散りつつあり、それに変わるように果樹の花々が咲き誇りつつある。もう山菜採りの季節だ。タラの芽・ゼンマイ・ワラビ……。やがて秋にはキノコ採り。ひたすら山中を歩き回る。松、杉、雑木林、そして落葉松の森、更には様々に変化のある組み合わせの山林。その中で観察力と注意力を磨く。冬は妻や子と共に休養の大地にスキーを楽しむ。そして夏にはバイクの旅に出る。幼い娘を後部座席に置き二年連続北海道を走った。今年か来年は下の娘を同様の旅に連れ出すつもりでいる。川に海に釣りの季節にもなった。山も待つているはずだ。山形に来て朝日の山を一度登ったにすぎない。文学や学問の世界から遠退いた今の生活だが、悠々自適ではない悠々自滅の生活を理想として生きていきたいと思っている。

(まき しゅうめい・一九七七年卒)